

### Ⅲ 総括

薬学教育6年制が開始されてから4年が経過した現時点で、本学の行ってきた教育及びそのシステムを全体として俯瞰すると、第Ⅴ章に記す基準ごとの評価項目を概観すれば明らかなように、大きな問題もなく、概ね順調な滑り出しをしたとすることができる。その中で、特筆すべき優れた点と早急な改善が特に望まれる問題点を挙げるとすれば以下のようなになる。

#### 優れた点

まず教育プログラムについて優れた点を挙げる。医療人教育の基本的内容に関しては、英語を1年から6年まで学ぶことのできる体制を作っている点、及び教養教育の柱として2、3年に「総合文化演習」を置き、考える力と自己表現能力の涵養を図っている点が特に優れている。また、本学は問題解決能力の醸成のためにSGDを中心とする自己研鑽・参加型学習を特に重視し、「総合文化演習」を始めとする数多くの演習科目の中に、全学年を通して取り入れているが、これも高く評価できる点である。

本学は他大学に先駆けて「早期体験学習」を行ってきたが、6年制開始後は通年科目として、導入講義から全体報告会、報告書の作成まで一連の綿密なプログラムのもとに実施している。また、平成19年に神戸大学と教育・研究面で連携協定を結んだが、その連携事業の一環として同大学医学部と共同で「初期体験臨床実習」を実施し、チーム医療について学ぶ機会を設けている。このように入学後の早い時期から医療の現場を体験し、学習意欲を高める工夫をしていることは優れた点に数えることができる。

平成20年に新教育棟11号館を建設し、CBTにも利用できるコンピュータ演習室やSGDのための演習室、調剤室、注射剤調製室などを完備し、実務実習事前学習や薬学共用試験の実施に有効利用している。また、同館に設置された薬学臨床教育センター並びに情報支援室は、それらの実施に当たっても主導的役割を果たしている。それに加えて実務実習事前学習においては、多数の指導薬剤師の参画を得て、きめ細かな指導が行われている。これらの相乗効果により実務実習事前学習と薬学共用試験が極めて円滑に実施されていることは誇るべき点と言える。

学生の支援に関しては、学習相談・助言体制の面で、平成18年に薬学基礎教育センターを設立し、オフィスアワー形式の補講や個別指導などにより、基礎学力に不安のある学生の学修を支援している点、及びクラス担任制度を採用して学生一人一人に対してきめ細かな指導を行っている点が特に高く評価できる。また就職支援の面では、早くからインターンシップに力を入れるとともに、キャリアカウンセラーや『神戸薬科大学就職支援システム』によって低学年から既に有効な情報提供、助言、指導を行っている点も優れている。

社会との連携という面では、本学は長年にわたり卒後研修・生涯教育に力を注いできており、平成19年には『有限責任中間法人薬剤師認定制度認証機構』から生涯研修プロバイダーとして認証を取得した。それとともに生涯教育の中核となるエクステンションセンターを創設し、同窓会との緊密な連携のもと、活動の一層の強化を図っている点は高く評価できる。

以上、優れた点を挙げたが、それらを見ると本学が6年制教育を始めるに当たって取った方策、

すなわち新教育棟の建設、神戸大学との連携協定締結、薬学臨床教育センター、情報支援室、薬学基礎教育センター、エクステンションセンターの設置がいずれも功を奏していることが確認できる。

#### 改善を要する点

本学に課せられた最も緊急の課題は教員組織の拡充である。専任教員の総数では大学設置基準の規定を満たしてはいるものの、実務家教員の数は現在1名不足している。1年後には要件を満たす見込みではあるが、実務実習とその事前学習を円滑に実施する上では更なる増員が不可欠である。またそれ以外の専任教員についても、負担が増している現状を見れば、薬学6年制の完成年度に向けて、増員を検討すべきであろう。

また6年制の完成年度に向けて、カリキュラムの見直しを行い、より充実した教育の実現を目指す必要がある。

次に、教職員に対する研修という面で、従来ほぼ定期的に研修会を開催し、その資質の向上に努めてきたが、学内にいまだFD・SD委員会が設置されていないのは問題である。この点は改善されなければならない。

最後に、自己点検・自己評価について、比較的早い時期から自己点検・評価委員会を組織し、定期的に点検を実施し、報告書を出してきたことは評価できる。ただし、その結果を受けて、改善へと導くシステムがいまだ確立されていない点は今後の課題として残されている。